

酪農教育ファームの認証を取得

ーファシリテーターも同時認証ー

3月31日、当センターは、「食やいのちの大切さ」を酪農体験を通して学ぶことができる酪農教育ファームとして認証されるとともに、職員が教育ファーム活動を支援するファシリテーターとして認証を受けました。

今後は、搾乳体験や子牛とのふれあい、アイスクリームなどの食品加工体験を通して畜産の大切さを伝えられるように取り組みを進めることとしています。



小学生の搾乳体験（22年夏）

認証牧場でファシリテーターが活動を支援
（当センター職員）

（参考）酪農教育ファームとは

牧場を食育の場として開放し、子どもたちが搾乳やほ乳などの酪農経験を通じて「食やいのちの大切さ」を学んでいくことを支援する牧場のことで、中央酪農会議が認証しています。当センターは谷牧場（南丹市）に次いで府内2番目の認証牧場となりました。

小麦の飼料利用に向けた調製・貯蔵技術の開発

当センターでは、家畜の飼料として小麦の利用を促進するため、刈取り後の小麦子実を未乾燥のままでも貯蔵できる低コストな技術を開発しています。

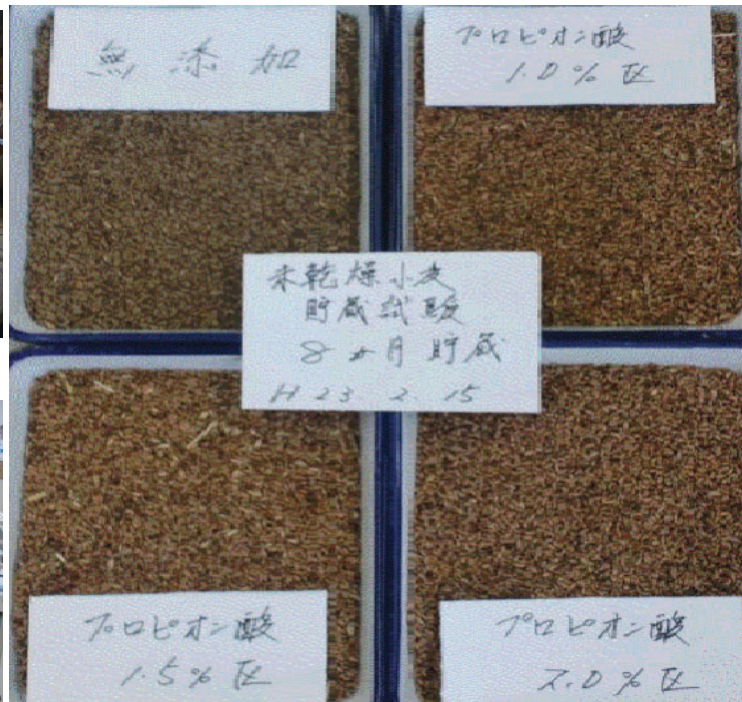
未乾燥子実（水分33%）にプロピオン酸を添加し、土囊袋で8か月間常温貯蔵したところ、プロピオン酸濃度が1.5%以上であればカビの発生もなく、また栄養価の低下も見られず、良好な品質を保てることが確認できました。



どのう
土囊袋で貯蔵



栄養価の分析



開封時の小麦子実（プロピオン酸の無添加、1.0%区はカビが発生し、1.5%区、2.0%区ではカビの発生なし）

高病原性鳥インフルエンザの防疫対策を強化

－ 9 県、24農場、約184万羽で発生－

昨年10月26日、北海道で野鳥のフンから高病原性鳥インフルエンザウイルスが検出されて以降、当センターでは、様々な防疫対策を講じてきました。

2月には、和歌山県、奈良県など近隣県での相次ぐ発生や3月に入って千葉県での発生により全国的な拡大が進行する中、当センターでは、渡り鳥の動きを警戒し、本病の好発時期を乗り切ろうと防疫対策をさらに強化しています。



防疫の基本となる鶏舎周辺の消石灰散布による消毒作業を
昨年10月以降計13回行いました。

サポートカウ事業を拡大

畜産農家の牛を地域の耕作放棄地に放牧する「サポートカウ事業」は、22年度は3農家8頭の和牛雌牛を3地域に放牧したところ、当該地域の活性化や畜産農家での飼料費の節減などの効果が認められ、継続実施の希望が絶えません。

今年は、放牧する地域や牛を借り受ける農家を新たに募るなど、より多くの地域で牛を放牧し、その効果を実感していただくため、事業をさらに推進します。



当センターで馴致放牧中の農家の和牛雌牛（平成22年8月31日）

乳牛の雌判別精液を用いた人工授精で雌子牛の誕生が続く

当センターでは、90%の確率で雌子牛が生まれる雌判別精液を用いた人工授精を実施しています。現在までに授精した延べ29頭のうち13頭が受胎し、受胎率は44.8%で、通常の性判別をしていない精液の受胎率と遜色のない成績となっています。また、生まれた5頭はすべて雌であり、今後は、通常の約2倍生産される雌子牛を育成して、農家に譲渡していきます。



雌判別精液で誕生した雌子牛

(左：3月19日誕生;父トレジャー 右：3月16日誕生;父BW7C-)

家畜人工授精師の技術向上のため

3月22日、家畜人工授精師協会中丹支部が主催する受精卵移植研修会が、綾部市の酪農家で開催され、当センターの職員が講師を務めました。

いつもは直腸に手を入れて触診で把握する卵巣の状態を、超音波画像診断装置を使い、卵巣状態が受精卵を移植する時期に適しているかを確認したり、授精師が日々直面する技術的な課題に対しアドバイスをを行いました。



超音波画像診断装置で
卵巣の状況を確認



受精卵の移植指導

ふれあい施設や放牧場の牧柵などが大雪で倒壊

－仮復旧で放牧開始、ふれあい広場オープンへ－

3月末でもまだ雪景色が広がる碓高原牧場では、「雪融け」とともに大雪による多くの被害が表面化しています。放牧場では、単管パイプの牧柵が雪の重みで湾曲し、ふれあい広場や展望台への遊歩道では、木製牧柵の折損、擬木牧柵の倒壊が目立っています。例年4月に行う放牧開始やふれあい広場のオープンに向け、これらの被害の仮復旧工事を行います。抜本的改修が必要です。



単管パイプの牧柵がグニャリ



大きく傾いた展望台遊歩道の牧柵

畜産センター
碓高原牧場